

1. はじめに

今回の豪雨水害に際し、2010年7月16日（金）晩から25日（日）まで、震災がつなぐ全国ネットワークのメンバーとして RSY スタッフの松田・藤田らが山口県山陽小野田市厚狭（あさ）地区での緊急支援に入った。また、現地ボランティアセンターになごや災害ボランティア連絡会から資器材一式（4 トントラック1台分）を送付した。

まずは、改めて被災された方々に心からのお見舞いを申し上げるとともに、今回の派遣を可能にして下さった震災がつなぐ全国ネットワーク、および日本財団に感謝申し上げる次第である。

日々の活動については当方より流したメールの通り（第1～12報／当法人HPから参照可能）である。また、現地はまだ概ね片づけが済んだだけの状況で、被災された方々は今後も畳入れ、家具の運び入れ、その後の生活の再建が続く。地元の意向に応じながら、今後も復興支援を検討する所存である。まずは今回の緊急支援の経験を共有するため、以下の報告にまとめる。

2. 被害概要

山陽小野田市内における今回の豪雨による被害は以下のとおりである。

厚狭川西側で床上浸水680世帯

活発な梅雨前線の停滞により15日未明から降り続いた雨で、厚狭川がはんらんし、厚狭地区を中心に約4ヘクタールが水没した。一夜明けた16日は早朝から水浸しになった家財道具や畳を搬出する住民の姿が目立った。鴨庄にある市浄水場が潰れ、水道水の供給がストップしたため、7地区に設けられた臨時の給水場にはバケツやペットボトルを持った人が列を作っている。浄水場の復旧には一週間程度かかる見通しで、大雨災害の後遺症は長引きそうだ。

美祢市では10日からの累積雨量が600ミリ近くになり、15日未明には東厚保や秋吉台で時間雨量50ミリ以上を記録。下流域にある厚狭川は水かさを増し、午前9時前には鴨橋周辺で護岸をオーバーフローして濁流が一気に町に流れ込んだ。厚狭川がはんらんし厚狭地区が水没したのは1953年以来という。

市は15日午前6時半に避難勧告、同8時半にエリアを拡大し厚狭、出合地区などの3,300世帯8,000人

に避難指示（16日午前7時35分に解除）を出した。周辺住民は近くの避難所に移動し、最も多い時（15日午後2時）には市保健センター、厚狭小など10カ所に80世帯166人が避難した。家屋の2階に取り残された住民も多く、消防署の救命ボートで救出された。

旧国道2号のウエスタまるき厚狭店周辺の道路には腰まで水があふれるなど、周辺道路はあちこちで冠水し、通行止めに。市文化会館は1メートル、寝太郎町の低い所にある地域は2メートル近く水没したところもあった。

市災害対策本部では、旧国道2号に架かる厚狭大橋を中心に厚狭川西側の約4ヘクタールが浸水したとみており、16日午前9時現在で床上浸水が680世帯1,550人、床下浸水が250世帯550人と推計。同日朝から現地調査に入っている。

県は山陽小野田市に災害救助法を適用し、16日午後には二井関成知事が厚狭川の大正川排水機場などを視察する。（宇部日報／2010年7月16日付記事）

○住家被害（棟）

全壊：0 半壊：8 床上浸水：438 床下浸水：355

○避難所開設（最大時／現在は全て閉設）

開設：10カ所 避難世帯数：95 避難者数：188人

（山口県防災危機管理課HP／2010年8月5日現在）

○災害ボランティアセンター

名称）山陽災害ボランティアセンター

場所）山陽総合福祉センター内

期間）7月17日（土）13:00～7月30日（金）12:00

その後、復興支援センター開設



図1 浸水する厚狭地区中心部
（山陽小野田市社協・中島氏提供）

3. 支援活動概要

3.1. スタッフ派遣

- 7月16日(金)：RSY 事務局長松田が現地入り。夜半に全国社会福祉協議会・後藤真一郎氏と合流。
- 17日(土)：後藤氏とともに山陽総合福祉センター入り。真宗大谷派研修委員会から支援に入った RSY スタッフ大谷らと合流。
- 18日(日)～20日(火)：山陽災害ボランティアセンターを拠点に、被害の大きかった厚狭地区、上流の松ヶ瀬地区、下流の鳥越地区での支援を実施。
- 20日(火)：RSY 代表理事栗田が現地入り。終日活動。
- 21日(水)：RSY スタッフ藤田が現地入り。25日(日)まで支援を実施。
- 24日(土)・25日(日)：中越 KOBE 足湯隊が現地にて活動。商店街の特設テントおよび出張で足湯を実施。佐用町社会福祉協議会からも3名が現地入り。

3.2. 資器材および物資の送付

3.2.1. ボランティア活動用資器材

- 7月17日(土)：当初は近隣市町村や小学校から資器材を調達しようとしていたが、見込みが立たず。山陽災害ボランティアセンターより松田を通じなごや災害ボランティア連絡会に資器材提供の要請。
- 18日(日)：8:30 なごや災害ボランティア連絡会メンバー他16名にてトラック積み込み作業開始。9:00 過ぎ終了。資器材の内容は、スコップ、デッキブラシ、ほうき、一輪車、バケツなど4トントラック1台分に相当。同日21:00 ごろ：トラックが山陽災害ボランティアセンターに到着(連休による渋滞のため予定より約3時間遅れ)。ボランティアセンタースタッフ等により積み下ろし。



図2 資器材積み下ろしの様子

資器材は翌日よりフル稼働した。また、ボランティアセンターから遠い地区については、一部資器材を積んだトラックによる提供も行った。送付した資器材の内容は概ね現地でのニーズと合致していたが、更なる需要があった資器材は、細かい箇所の泥出しをするための小さなスコップ、鋤簾、ゴム手袋であった。

3.2.2. 氷砂糖

中日本氷糖(株)とRSYが締結した「災害救援・復興支援に関する協定書」に基づき、疲労回復やのどの渇きに効果があるとされる「なつかしの氷砂糖160g」1,000袋が中日本氷糖より現地へ提供された。

提供された氷砂糖は、RSY スタッフや山口県看護協会から派遣された看護師ボランティアをはじめとする現地ボランティアにより、片づけ作業中の被災者やボランティアに手渡された。受け取った被災者からは「お父さんが好きだからよかった。懐かしい」、「年寄りなのどが渇いてしょうがないと言っていたからやってみる」等の声が聞かれた。なお、泥だし作業中のため手が汚れている方からは「氷砂糖が個装ならばなめられるのに」という声も聞かれた。これらの声は今後につなげていきたい。



図3 氷砂糖を手渡している様子

4. 現地の様子・被災者の声

○被災直後(17～18日。通水前)

- 「水がないので片づけられない」…どぶ川を使って洗い物をする様子も。
- 「知っている人の顔をみて安心した」(松田が同行した地元の個人ボランティアさんに一目会って。70代女性)



図4 7月18日の被災地の様子（厚狭地区）

○町なかから離れた集落にて（18日）

- ・ 「市ながひどいのは知っているが、ここはもっとひどい。水が渦を巻いて、竹やぶが上から動いて来るのを見た」
- ・ 「見放された。ここには誰も来ない。弁当の配給も知らない。」

○被災後3日～1週間（19日～24日）

- ・ 「片づけたいけど暑くて疲れてもう何も考えられない。ボランティアに指示するのもしやだから、お父さんとぼちぼち片づける」（70代女性）
- ・ 「夜は保健センターに寝にいつている。ベッドの枠が泥だらけのため、これをきれいにするまでは、家で寝られない」（70代女性）
- ・ 「気持ちいい〜」（ボランティアの看護師からおしぼりを渡され。40代男性）
- ・ ずっと熟睡できなかったけど、昨日はよく眠れた。（50代女性）
- ・ 一通り片付いたと思っても、家具の裏など細かい箇所をやりだすとときりががない。（50代男性）

○支援する側の声

- ・ 「久しぶりに体を動かして、地元の人役に立って充実していた。明日も参加しようかね」（ボランティアに参加した地元民生委員）
- ・ 「現場を見ると言っても、車の中から眺めるのと、実際に近くで見るとは大違いだった。あんなに泥がついているなんて信じられない」（現場に出た地元社協職員）
- ・ 「住んじよる人は、地元の人分かるけんね。都会の人は分かるけんね」（自分が地域に出る理由について。地元社協職員）

○足湯のつづやき

- ・ 「ずっと休みなしだから、もう疲れはピーク。足湯はありがたい、是非行かせてもらうよ。（チラシ配布時に。60代男性）
- ・ チラシを配布した方の多くは、足湯に来て「気持

いい〜。」「体が楽になった。」と言って帰られた。二度来てくれた人もいた。

5. 支援者としての発見

5.1. 山口県で引き継がれる「おしぼり」の智慧

山口県では、県看護協会がボランティアの看護師を派遣する体制が整えられていた。彼女らは、昨年の防府市での活動経験から、熱中症対策のためペットボトルと冷たいおしぼりを配り、ボランティアの体調管理を行う活動をしていた。

地域を廻る彼女らが被災者の状況を把握していることがわかり、またボランティアセンター内にも「現場を見ていない」との声が上がったため、タオルを冷やした冷たいおしぼりを配りながら地域を回る活動を提案し、地元社協職員らが数日間にわたり実施した。

とはいえ、多数のニーズを集め、数をこなすことに集中するセンターでは、新しい活動の提案は受け入れがたい。そこで、被災者の声を聞くこと、そして地元のスタッフこそ現場に出てみてはいかがかという提案を落ち着いた形で理解して頂けるよう、スライドを使用した簡単な資料を作成し、運営スタッフに見て頂いた。これを発表することができたのは、反省会でプロジェクトを使用することを許可して下さった副センター長の機転によるものである。また、常に現場に出ることを忘れなかったセンター長の姿勢によるところも大きい。

幸い、県内各所から大量のタオルが寄付されていたため、翌日から「おしぼり班」の活動は始められた。氷水に浸したおしぼりづくりは、普段は地元で音訳ボランティア活動をしている女性たちが行った。

地域を良く知る副センター長とともに歩き、おしぼりを手にした途端、浸水時の様子や片づけの苦労を一気にお話する方に何人も出会った。



図6 冷たいおしぼりを頭に片づけを一休み



図7 ワンちゃんも冷たいタオルで一息
(図6・7 山陽小野田市社協・中島氏提供)

6. 所感

6.1. 地域につなげる支援（松田）

残念ながら、この規模の水害は今後も各地で頻発するだろう。

私たちの支援は、矢野正広氏（とちぎVネット）が「災害ボランティア文化」で述べているような「その場の1回限りのアイデア」を大切にすることであると同時に、できる限り経験や教訓を地域と共有するものでなければならない。そうした支援でなければ、今後被災する地域の数に比べ、外部支援者の数が追いつかなくなるだろう。山口県内の社協スタッフは、私たちのような支援団体との協力関係も含め、経験を着実に教訓とされているように見受けられた。また、県の看護協会等の協力体制も見習う点があった。

6.2. 水害ハザードマップについて（松田）

RSY はこれまで水害の手づくりハザードマップづくり事業等に携わってきた。今回の被災地支援経験を踏まえ、洪水ハザードマップの実効性について、直観的に感じたところを記しておく。

今回の厚狭川氾濫に関する「浸水実績図」は、早晚河川管理者である山口県から発表されるだろう。私たちが被災地を歩いた範囲で公開されている厚狭川洪水ハザードマップと比較すると、浸水地域も、浸水高も概ね合致しているように見受けられる。しかしながら、以下のことには留意が必要である。

- 「よく浸かる地域」は、古くから住む人にとっては常識であり、このハザードマップは彼らにとって特段新しい情報をもたらすものではない。
- 当時の降雨量は未調査だが、仮にその雨が「100年に1度」の豪雨だったとすれば、50年確率の

洪水を基に描かれたハザードマップと同じ浸水状況は言わば想定内である。しかし、多くの被災者は実際には「こんな洪水は生まれて初めて」と証言する。市街地の開発状況や、河川の整備状況などハザードマップには表れない情報もある。

- 上流で「取り残された」と話した住民の地域はそもそもこのハザードマップの枠外にある。マップが地域における全てのリスクを網羅しているわけではない。

6.3. 心に残った場面（藤田）

- 最初は業務で支援に来た人が、所定の日数が過ぎても「もっと関わりたい。」と仰ったり、同じ市内で大変なことが起きていると聞いて駆けつけた方が、当初は一日のボランティア活動のつもりが、その後何日も居続けたりする姿を見た。大変な思いをされている方のために何かしたい、自分にも何かできるという思いが強く伝わってきた。
- 昨年の水害で大きな被害を受けた、山口県防府市や兵庫県佐用町から社協職員が応援に駆け付けている姿を見て、被災地支援の輪が広がっていくことを心強く感じた。
- ボラセン開所5日目からの参加ではあったが、ボラセン内部・ボランティア活動ともに、大変な時期を乗り越え、終息に向かっていく変化を感じることができた。

6.4. 感想（藤田）

- 夏の災害で、しかも猛暑日が続いていたということもあり、外で活動をすると思いのほか体力が奪われるため、暑さ対策をはじめとする体調管理を強く意識する必要があると感じた。
- 非日常+暑さで、被災者もボランティアもスタッフも疲れている。そんな中では、励ましあいや気遣いが大事である一方、言動や行動の一つ一つが必要以上に気になることを感じた。
- 外部から来た者の役割を意識すればするほど、どうしてよいのかわからなくなっていた。何もできないけれど、とりあえずできることをやるしかないと思った。
- 多くの方が口にする「顔の見える関係」の大切さを実感した。以前から顔見知りのある方の存在を大きく感じる一方で、何度か顔を合わせるうちに、今迄つながりのなかった人も次第にそのような存在になっていく可能性を感じた。